

FD ワークワークショップ実践報告 デザイン力向上の支援を目指して

Faculty Development Workshop for the Design Skill Improvement

根本 淳子 鈴木 克明

Junko NEMOTO Katsuaki SUZUKI

熊本大学大学院 教授システム学専攻

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

〈あらまし〉 日本教育工学会が実施する FD 研修会第3回として、授業改善を目的とした1日のワークショップを、29名を対象に設計・実施した。参加者各自が持参したシラバスや授業案をもとに、開発したワークシートを用いて授業改善の検討を行う実習中心の内容とした。最終レポートからは目標・評価の見直しと授業案の具体性が高まり、本研修の効果を確認できた。

〈キーワード〉 ワークショップ インストラクショナルデザイン 授業設計 FD

1. はじめに

日本教育工学会では大学教育の授業改善や教員の授業力向上に寄与することを目的に2009年からFD研修会(ワークショップ)を実施している。本発表では平成24年2月に実施した第3回目の実践「大学授業デザインの方法・1コマの授業からシラバスまで」について報告する。

2. 研修会概要

本研修会は、高等教育に従事する教員を主に対象とし、参加者が実践を見直し改善を行うことを目的とした。参加者は担当する授業のシラバスや授業資料(スライド・プリント・板書ノートなど)を持参し、それらをもとに授業の見直しや改善案について検討した。研修会は講義をしないで実習中心に行い、最初に認定条件を明示するなど、FD研修会そのものに望ましいと思われる授業方法を採用するように工夫した(表1)。

前半は研修の位置づけを明示しつつ積極的な活動を促すことを意識し、持ち込まれた授業の課題やそれらの改善策となるキーワードに関するグループディスカッションを中心に実施した。後半は実践について検討する機会を設けるために、類似した授業や課題を持った参加者とペアになり、相互に授業内容を聞き取った内容を開発した「授業設計の点検ワークシート」に書き込んでいった。ペアワークの成果はグループ内で共有し、最後に研修を振り返り、研修内容を踏まえた授業改善案をレポートとして提出させた。

ペアワークでの聞き取りやグループ内の事例

報告は自分の実践について整理する機会を、相手の実践を聞きながらワークシートへ記入することは自分と相手の実践を照らし合わせることで新たな気づきを得る機会をそれぞれ狙った。ワークシート記入時に必要な情報を講義からではなく、各自が必要なタイミングで用意された配布資料から得られるようにし、参加者の主体的な活動を重視した。ワークシートはインストラクショナルデザイン(ID)の概念を取り入れ、授業の分析に重要とされる点検項目6点と、何を継続し、何を変更したいのかを記述する2点の計8点で構成されている。

表1 ワークショップ概要

<午前>授業のデザインに関する問題意識の明確化と情報・課題の共有 ・ 導入+最終レポート合格基準の確認 [全] ・ 持ちこんだ課題についての議論[個+グ] ・ 研究キーワードについての議論 [個+グ] ・ IDの前提についての議論 [個+グ]	分 10 60 20 30
<午後>「最終レポートを意識した授業分析と改善案の検討」 ・ ワークシートへの書き込み [ペ] ・ 資料を用いたワークシートの見直し(1)(目標と評価) [ペ] ・ 資料を用いたワークシートの見直し(2)(方法) [ペ] ・ ペアワーク事例報告[グ]+リフレクション[個] リフレクション[全]+Q&A	分 40 40 40 80 30

*注：[全]全体，[個]個人，[グ]グループ，[ペ]ペア

点検6項目は、授業設計に必要な「目標」(1. 誰に何を教えようとしているか, 2. それは何故か), 「評価」(5. 単位取得の要件は何か, 6. それは科目の目標と合致しているか), 「方法」(3. どうやって教えているか, 4. それは何故か)の授業設計の3要素とそれぞれ対応させた。

3. 最終レポート分析結果

研修当日の参加者は29名であり、そのうち17名が最終レポートまで完成させ、学会より認定書が発行された。提出された最終レポートのうち、演習的なものを取り上げたものは11人、講義主体のもの6人であった。

表2は受講者の着眼点を、研修で用いた授業の点検ワークシートの主要3要素とそれらに当てはまらない「その他」に分類した結果である。各受講者が取り上げた授業に対して、セミナー開始時に考えていた「変えたいこと」、研修後に提出したレポートでの「変更したいこと(二つ以上)」、研修に参加して「収穫に思った点(3つ)」、そして提出されたレポートに対し筆者らが「指摘したこと」を分析した。

セミナー開始時には、どのように授業のやり方を変えるかという「方法」に焦点が当たっている人が多かったが(20人)、研修を受講した後に振り返った成果として、「目標(6人)」と「評価(16人)」についての記述が増えた。「目標」は、「学生に目標を明示する(3名)」と「目標を変更・見直す(3名)」に分類できた。「評価」には、「評価全体を見直す(7名)」、「振り返りの場を追加・改善する(5名)」といった内容が目立った。「3つの収穫」では「その他」に関する意見が最も多かったが、「IDの手法やその魅力(6人)」という知識に関するものや「他者のシラバスや実践を知ることができた(4名)」、参加者と議論できたことで「客観的に自分の実践を見ることができた(2人)」、「アドバイスやアイデアを得ることができた(3人)」など参加者間のやり取りが収穫だったという意見が目立った。このように最終レポートからは、目標と評価の整合性について検討することの重要性や、それを踏まえた設計など、ワークショップで実施者が意図した成果が表れていることを確認できた。一方で、提出されたレポートに対し「指摘したこと」には、目標に関する指摘(1名)や、評価に関する指摘(15名)が含まれており、実施方法やワークシートに改善の

表2 最終レポートの着眼点

項目 (時期)	目標	評価	方法	その他	合計
変えたい点 (セミナー開始時)	1	3	20	1	25
変更したい点 (レポート提出時)	6	16	19	3	44
3つの収穫 (レポート提出時)	3	2	16	33	54
指摘したこと (レポート提出後)	1	15	12	11	39

注釈:すべて複数回答、単位は人
余地があることも示唆された。また、セミナー開始時と終了後のレポートを比較すると、セミナー開始より具体的な方法が書かれているレポートが増えていた。例えば、開始時には「変えたいこと」として「学生による演習問題の解説」とだけ書かれていたことが、終了後のレポートでは「前回の演習で扱った問題の解説を学生が行い、学生の解説に関して質疑応答させ、そのあと問題を解いて最後に模範解答を配布する」という改善案を、ワークショップで得られた知識やアイデアを踏まえて提案してきていたものなどがあった。

4. まとめ

FD研修会の参加者が提出した最終レポート分析から、実施者が意図した内容を踏まえた授業改善、特に目標と評価の重要性とそれを踏まえた方法を活かした授業改善案が作成されていることを確認した。自分の授業を見直すという活動中心のワークショップのデザインが有効であったと思われる。また、このようなFD活動には、自分の実践に向き合う個人活動と併せて、仲間と話し合うことや他者のアイデアや意見を聞くことで考えを整理し、各実践が有する課題の解決策を探ることが重要であることも明らかとなった。

今後の課題として、開発したワークシートの改善が必要であることも示唆された。授業活動を整理しようとしても、未経験者などが短時間で目標と評価、それらに対応する学習活動の関連性について整理するのは難しい。ワークショップ運営とそれに適したワークシートの改善により、さらに高い効果が期待できると考えられる。

謝辞

研修会の開催を支援いただいたFD特別委員会各位と、学会での報告等を承諾していただいた参加者各位に感謝致します。